

令和 5 年 5 月 15 日現在

機関番号：33704

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13401

研究課題名(和文)近世初期『万葉集』写本の系統的研究

研究課題名(英文)A Systematic Study of "Man'yoshu" Manuscripts in the Early Edo Period

研究代表者

大石 真由香(Ooishi, Mayuka)

岐阜聖徳学園大学・教育学部・講師

研究者番号：40624060

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世初期における『万葉集』の書写・利用の様相を明らかにし、『万葉集』受容のありようを総合的に捉えようとするものである。近世初期の堂上において数多く書写された中院本系統の写本は、室町期に今川範政が『万葉集』を校訂し後に禁裏に入った「禁裏御本」による校合の成果を、代赭または紫で書き入れている。この書入を検討することにより、現存しない「禁裏御本」のすがたを復元することが、本研究の主軸であった。当初は陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」紫書入を研究の中心に置いていたが、2019年度から、「禁裏御本」唯一の転写本の可能性をもつ京都大学国語学国文学研究室所蔵『万葉集』巻二・巻三を検討対象に加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「禁裏御本」は中世から近世初期の『万葉集』受容に強い影響力をもつ本でありながら、原本はおろか転写本さえ存在せず、従来の研究においてその実態は中院本系写本のわずかな書入から推測せざるを得ない状態であった。しかし当該研究において、「禁裏御本」に直接基づくと推定される陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」紫書入、「禁裏御本」の転写本とも目される京都大学国語学国文学研究室所蔵『万葉集』巻二・巻三の詳細な調査を行い、巻二・巻三というわずかな部分ではあるが、その実態を解明することができた。中世から近世初期における『万葉集』受容の研究を進展させるための基盤を作ることができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：This study aims to understand comprehensively of the acceptance of the "Man'yoshu" in the early Edo period. A group of "Man'yoshu" manuscripts known as the "Nakanoin-bon lineage" were copied around the Imperial Household in the early Edo period. In these manuscripts, there are many notes by the "Kinri Gohon", a book that was examined and compiled by Imagawa Norimasa and for which neither the original nor a copy exists, written in brown or purple. The main focus of this study was to restore the form of the "Kinri Gohon" by examining these notes.

Initially, the research was focused on the purple notes of the "Man'yoshu", printed in letterpress, in the collection of the Yomei Bunko. But from 2019, "Man'yoshu" scrolls 2 and 3, which are owned by the Kyoto University Japanese Language and Literature Laboratory, have been added to my research. Because it was discovered that this book may be the only transcription of the "Kinri Gohon".

研究分野：上代文学

キーワード：万葉集 禁裏御本 仙覚本 中院本 陽明文庫

1. 研究開始当初の背景

2017年度の当該研究開始当初は、大正期に『校本万葉集』(1924-25 校本万葉集刊行会)が出て以来長らく低迷していた『万葉集』の受容史研究や文献学的研究への機運が高まりを見せていた時期であった。小川靖彦『萬葉学史の研究』(2007 おうふう)、城崎陽子『近世国学と万葉集研究』(2009 おうふう)、田中大士の非仙覚系片仮名訓本に関する諸考察(『春日懐紙(大中臣親泰・中臣祐基)』(2014 汲古書院)、『衝撃の『万葉集』伝本出現』(2020 はなわ新書)等にまとめられた)など重要な書籍が次々と提出された。殊に2015年には、2015高岡万葉セミナー「古写本の魅力」(於高岡市万葉歴史館)第1回上代文学会夏季セミナー「萬葉写本学入門」(於青山学院大学)(小川靖彦編『萬葉写本学入門 上代文学研究法セミナー』(2016 笠間書院)にまとめられた)など各地で『万葉集』写本のセミナーが開催された。

さらに2014~2016年度には国文学研究資料館共同研究(特定研究)「万葉集伝本の書写形態の総合的研究」(研究代表者:田中大士)が行われ、『万葉集』伝本や受容史の研究者が一堂に会して研究を進めることになった。申請者もこの共同研究に研究協力者として参加した。

この成果は研究報告書として公開されているが、中でも野呂香「翻刻 京都大学附属図書館所蔵『曼朱院本萬葉集』(4-23/マ/2 貴別)巻一~五」は、仙覚校訂本の中でも最も現存伝本の多い中院本の代表たる「京大本」の、従来認知困難であった多数の色墨による書入が可視化され、後の『万葉集』伝本研究の発展に大いに貢献するものとなった。殊に代赅による書入は、京都大学貴重資料デジタルアーカイブ掲載の画像ではほとんど確認できないものであった。

この代赅書入は、室町期に今川範政が仙覚文永本(第二次校訂本)を書本とし仙覚寛元本(第一次校訂本)を校合して校訂し、後に禁裏に入ったとされる「禁裏御本」の内容を書き入れたものと考えられている。「禁裏御本」は中世~近世期の『万葉集』受容に大きな影響を与えた本であり、また仙覚校訂本として流布した文永本以前のものである寛元本のすがたをうかがうことができる点で重要な本である。にもかかわらず、原本も転写本も現存せず、その存在は、中世末期~近世期に数多く書写された「中院本」系統伝本の書入によって認識できるにすぎないとされていた、「幻の本」なのである。この書入内容が、巻一~五に限定されているとはいえ、広く研究者に公開されたことは非常に大きな成果であったと言える。

このように2017年当初は、『万葉集』伝本の中でも特に「中院本」、「禁裏御本」がようやく注目され始めていた時期であったのである。

この間、申請者は科学研究費助成事業若手研究(B)「近世初期の堂上における『万葉集』受容について」(2012~2014年度 研究課題番号:24720096)、特別研究員奨励費「近世初期の堂上における『万葉集』受容の文献学的研究」(2014~2016年度 研究課題番号:14J00178)の助成により、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」(10巻20冊)書入の悉皆調査を進め、当該本の撮影を行い、カラー画像データを得た。また、大学院生をアルバイトとして雇用することで『校本万葉集』のデータ化にも取り組んできた。

陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」は、「京大本」同様、全巻に亘って複数に色分けされた書入をもつが、このうち紫による書入は、「中院本」を経由せず直接「禁裏御本」に基づくものであることが推定されるものである(拙稿「陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」について 校合関係に関する調査を基に」『萬葉』(萬葉学会)208号 2011年3月)。申請者は、前掲野呂氏の研究とほぼ同時期に、軌を一にしつつ、別の角度から「禁裏御本」について捉えようとしていたのである。

一方、上記2種の科研費助成期間中に、申請者の『万葉集』受容史研究は、近世初期の地下歌壇における『万葉集』研究の様相を解明する方向へも広がっていた。特に研究対象としたのは藤原惺窩校正本『万葉集』の伝本である。惺窩校正本は、初学者を対象とした古典注釈書を数多く著し影響力をもった二条派歌人・北村季吟が『万葉拾穂抄』執筆にあたって底本としたことで、江戸期を通じて『万葉集』受容に大きな影響を与えた本である。申請者は惺窩校正本の伝本数本を実見し、その系統を把握しつつ、藤原惺窩の『万葉集』改変の理由を明らかにした。この成果は、平成28年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費(学術図書)(課題番号:16HP5035)の助成を受け、学術図書『近世初期『万葉集』の研究 北村季吟と藤原惺窩の受容と継承』(2017 和泉書院)として出版した。

以上が、2016年度までの『万葉集』受容史に関する研究動向および申請者の研究背景である。

2. 研究の目的

以上に述べた通り、近世初期においては、堂上における「中院本」の書写・利用の動きと、地下歌壇における『万葉集』研究とがそれぞれに大きなうねりを作り、それらが互いに関わり合いながら一時代の『万葉集』受容の様相を形作っているのである。

地下歌壇における国学へと続く近世的研究の萌芽期の動きは、上記学術図書において明らか

にすることができたと考えている。しかし、申請者が上記科研費 2 種の助成による研究開始当初より志していた、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入の悉皆調査による「禁裏御本」のすがたの復元は、いまだ途上であった。

当該本の紫書入が「中院本」を経由せず「禁裏御本」に直接基づくと推定されたことは、「禁裏御本」が従来考えられていたより広く、複雑な過程を経て校合された可能性を示唆する。中世～近世初期における『万葉集』受容において「禁裏御本」が、従来考えられていたよりも大きな影響力をもっていたことがうかがわれるのである。さらに、「中院本」に流入する以前の「禁裏御本」のすがたを残す当該本紫書入の存在は、これまで知られなかった仙覚寛元本（第一次校訂本）の把握を可能にし、仙覚文永本（第二次校訂本）成立以前の『万葉集』伝本についての研究を飛躍的に発展させることが期待される。ゆえに、当該本の調査および「禁裏御本」の復元は、『万葉集』の伝本研究において喫緊の課題であると言える。

本研究は、近世初期の堂上における『万葉集』受容の様相と、『万葉集』仙覚校訂本の伝本系統を明らかにするため、特に「禁裏御本」に焦点を絞り、「禁裏御本」書入本の調査から、「幻の本」とされるそのすがたを復元することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の主軸となるのは、申請者がこれまでも継続的に行ってきた陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入の悉皆調査である。当該本の紫による書入の調査により、「中院本」に流入する以前の「禁裏御本」のすがたを復元しようとするものである。

加えて、「京大本」以外の「中院本」系統に分類される伝本の調査を行い、現存資料からできる限り精緻に「禁裏御本」のすがたを解明することを目指す。

具体的には下記の通りに調査を行った。

(1) 陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」(10 巻 20 冊) 書入の悉皆調査

これまでに調査を続けてきた陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入について、すでに手元にある画像データによって確認しつつ、月に一度陽明文庫に通い、特に紫の書入箇所について確認作業を行った。一方、大学院生をアルバイトとして雇い上げ、『校本万葉集』の諸本異同を一覧できるように各句切りの Excel データを作成した。

これらの調査に基づき、「中院本」の代表とされる「京大本」代赭書入と、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」の紫書入のある箇所を対照し、さらに『校本万葉集』所収諸本の異同を一覧できる Excel データを作成した。これらの作業から得られたデータから、先行諸本の多様な訓のうち「禁裏御本」が採用した訓の性格を明らかにすることを目指す。

(2) 「京大本」以外の「中院本」系統伝本の調査

従来の「禁裏御本」に関する研究は、専ら「京大本」の代赭書入によって行われてきた。しかし「中院本」には伝本が多く、その各伝本は詳細に調査をすると、少しずつではあるが本文や訓に異同が存在する。そこで、「京大本」以外の伝本として 伝空性法親王筆本（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）、尊経閣文庫仙覚本（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）、岩崎文庫一本（東洋文庫所蔵）、野宮定基筆本（石川武美記念図書館所蔵）の四本を特に調査対象とし、「禁裏御本」の書入箇所について原本を実見し調査を行った。また、本についてはコロナ禍において調査継続ができるよう、複写物を得た。さらに、多和文庫本（多和文庫所蔵）については研究期間内にコロナ禍に入ったため原本を確認することはできなかったが、国文学研究資料館のマイクロフィルムを用いて調査を行い、複写物も得ることができたため、調査対象として加えた。

(3) 京都大学国語学国文学研究室所蔵『万葉集』巻二・巻三の調査

研究を進めるうち、従来「中院本」とはみなされていなかった京都大学国語学国文学研究室所蔵『万葉集』（零本七冊）のうち巻二・巻三に、「禁裏御本」からの書入とみられる訓が存在することが知られた。そのため、当該科研費の研究開始当初は研究対象としていなかった当該本を研究対象として加えることとした。当該本は原本を確認しつつ、複写物を得ることで研究効率をあげるよう努め、当該本が「禁裏御本」の転写本である可能性について検討した。

4. 研究成果

当該科研費の研究期間における関連する研究成果は次の通りである。

(1) 陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入から推定される「禁裏御本」の書物としてのすがたについて、特に全巻に付されている朱の星をたどることによって復元を試み、口頭発表（単独）「『万葉集』禁裏御本のすがた 陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入による復元の試み」（和歌文学会第 124 回関西例会 2017.7.1 於奈良女子大学）として発表した。さらにそれに再検討を加えたものを、学術論文（単著）「『万葉集』禁裏御本のすがた 陽明文庫所蔵「古活字本万葉

集」書入による復元の試み」(『国語国文学』89 巻 3 号 京都大学文学部国語学国文学研究室 2020.3 25-44 頁)として発表した。

(2)「京大本」および ~ 本の異同を一覧にした Excel データを作成したものの、当該科研費による研究開始後に(3)の発見を得て、「禁裏御本」の復元にあたって(3)の研究成果の公表がより喫緊の課題となったため、(2)を単独の研究成果として公表するには至らなかった。ただ、(3)の研究成果を得るにあたって、これら同系統伝本の異同を確認できたことには大きな意味があったと考えている。

(3)京都大学国語学国文学研究室蔵『万葉集』巻二・巻三が「禁裏御本」の転写本である可能性について、口頭発表(単独)「京都大学国語国文学研究室蔵『万葉集』について」(平成30年度上代文学会大会 2018.5.27 皇學館大学)において初めて公表した。この口頭発表に基づき、(2)における調査結果をも踏まえて再検討を加えた学術論文(単著)「京都大学国語学国文学研究室蔵『万葉集』について」(『岐阜聖徳学園大学国語国文学』38号 岐阜聖徳学園大学国語国文学会 2019.3 45-67 頁)を発表した。さらに、「禁裏御本」を代赅で書き入れた本である「京大本」と、「禁裏御本」の転写本と目される当該本の附訓のありようの比較から、「京大本」の本文の右傍に附される訓が「禁裏御本」の主訓であること、それを主訓としてもつ当該本はやはり「禁裏御本」のすがたをそのままに写した唯一の転写本であることを、学術論文(単著)「京都大学国語学国文学研究室蔵『万葉集』の系統 京大本代赅書入との関係をめぐって」(『岐阜聖徳学園大学国語国文学』42号 岐阜聖徳学園大学国語国文学会 2023.3 52-64 頁)において明らかにした。

また、「京大本」(1)本、(3)本を一覧にして対校できるようにした資料を学術論文(単著)「『万葉集』禁裏御本巻二・巻三の対校表 京都大学本・陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」・京都大学国語学国文学研究室本」(田中大士編『万葉写本研究 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)18H0064「万葉集仙覚校訂本の総合的研究」研究成果報告書』2023.3 1-44 頁)として発表した。

今後、(1)(2)の全巻にわたるデータを公開し、(1)~(3)の調査・研究の成果を取りまとめ、より精緻に、より広い視野で「禁裏御本」の復元と伝本系統上の位置づけについて検討を加える必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大石真由香	4. 巻 42
2. 論文標題 京都大学国語学国文学研究室蔵『万葉集』の系統 京大本代赭書入との関係をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学国語国文学	6. 最初と最後の頁 52-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大石真由香	4. 巻 なし
2. 論文標題 『万葉集』禁裏御本巻二・巻三の対校表 京都大学本・陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」・京都大学国語学国文学研究室本	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 万葉写本研究 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）18H0064「万葉集仙覚校訂本の総合的研究」研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 1-44（左開き）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石真由香	4. 巻 89-3
2. 論文標題 『万葉集』禁裏御本のすがた 陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入による復元の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石真由香	4. 巻 38
2. 論文標題 京都大学国語学国文学研究室蔵『万葉集』について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜聖徳学園大学国語国文学	6. 最初と最後の頁 45-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大石真由香
2. 発表標題 京都大学国語国文学研究室蔵『万葉集』について
3. 学会等名 平成30年度上代文学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大石真由香
2. 発表標題 『万葉集』禁裏御本のすがた 陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入による復元の試み
3. 学会等名 和歌文学会第124回関西例会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------